
世界変革戦争

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界変革戦争

【Nコード】

N2850P

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

世界は恐慌に陥る。未解明の、だが明確な『敵』を打ち倒すべく、『馬鹿』が行く。

プロローグ

見渡す限りの世界が、白銀に支配されていた。
鼓膜を突き破らんとする轟音の波。冷氣と音にやられた耳は、もはや機能を放棄していた。

目前を舞うは雪片。数多の白。
認識できない。認識できるのは、薄ぼんやりとした世界だけ。
遊びに吹き荒れる吹雪は、視界を邪魔すると共に、いたずらに男の身体の体温を奪っていく。

——ああ、

声を喉から出すでもなく、男は胸中で、それ自体の言葉には意味は無く、その中にあるものに多大な意味がある、ただの溜息を吐く。
男は白銀の世界を、ただただ進んでいた。突き進んでいた。
向かうところはない。
さつきまでは向かう場所があった。
だがそれはさきほど達成した。

——ああ、

本来ならこの男は、男が知った、『知ってしまった』情報を届けに戻らなくてはいけない。

落胆。諦め。

その色を映した男の顔は虚ろ。男の足はどこにも向かっていない。

男が、男が届けなくてはいけない情報と共に、男は知ってしまった。

自分がもう長くないことを知ってしまった。

——ああ、

体温を奪われぬよう着込まれた毛皮の防寒具。その腹に押し当てられた、手袋に包まれた右手の隙間を縫うように血がとめどなく流れていた。

痛みか、寒さか、恐怖か。どの理由でか震える唇から洩れる息が白く凍りつく。

戻らなくてはいけない。

男は、男をここに派遣させた上司に、絶望を教えるために戻らなくてはいけない。

白銀の世界を歩くその男以外にも、人間はいた。その男の仲間がいた。

その仲間達は、生命を宿してはいない瞳を隠すように、今は吹きすさぶ雪達によって覆われている。

——ああああああ、

男の脳内を駆け巡るのは仲間、友人、両親、兄弟、家族。

急速的に迫る死の恐怖もないのに、男の頭の中で、せつかな男の脳は走馬灯を彼に見せている。

メリーゴーランドのようにぐるぐる、ぐるぐると、子供の時に乗った、あの時の無邪気さを思い出させるように、ぐるぐる、ぐるぐ

ると、幸せを、幸福を、男に見せて、だがその無邪気さを裏切り絶望を

男に叩きつける。

——あああああああああ、

死にたくなかった。死にたいはずがなかった。

生きたい。だがそれは叶わない。

男は泣いた。心の中で、山を削る豪雨のような悲鳴を響かせ、男は泣いた。

不甲斐ない、不甲斐ない、不甲斐ない。

上司に知らせなくては。生きて、上司に、自分が知ってしまったことを、死んでいった、雪に隠されてしまった仲間達の無念の分まで生きて、生きて無事に帰って、知らせて、そしてその後は家族の下に笑顔を湛えて、笑顔を携えて、安心させて、自分の無事に自分が泣いて、生きていることを神様に感謝して、だから生きて、帰って、

——あああああああああ

巡り巡るメリーゴーランドが男を裏切る。

それを見るのは、死に逝く者だけなのだから。

男の背後には、男の血の匂いを嗅ぎつけてきた、この世ならざるものがいた。

一言で言えばたこのようなフォルムのそれは、たこにあるまじき

黒に全てが彩られており、まるでなにかの冗談のように巨大だった。男をそのまま呑みこめるであろうと判断できるほどの大きさを持つそれは、さらに冗談を付け加えるように、宙に浮いていた。

横から叩きつける風。それに乗っている白の雪。全てを凍らせる冷気をもともせず、なにものの抵抗も受けていないかのようにふわりふわりと宙に浮かんでいた。

男は、背後の存在に気付いていた。

それでも振り返らなかった。振り返れなかった。

そいつは、男の仲間を殺した存在。そして、己を殺す存在だからだ。

直視できるはずがなかった。

男はただ逃げる。そいつから逃げる。生きるために、生き残るために。

男の背後の存在は、男のその行動を嘲笑いはしない。

それにとっては、そんな感情は無いからだ。

それにとつては、男はただの『獲物』で、『餌』だったからだ。

自然界にいるはずのないそれは、自然界にある動物の常識をもつて、男の背後からその触手を勢い良く突き立てる。

肉を、穿つ音。

男は、呆然と自分の胸から生えるそれを見て、今度こそ本当に、胸の中ではなく現実に、涙した。

メリーゴーランドは途切れていく。その役目を終えていく。

男の虚ろの目からこぼれた涙を世界は許さず、否定するため水滴を凍らせる。

男は一步を踏み出そうとした。その身体はもう死に体だったが、男の身体は男の意思を無視して、いや、男の身体に残った意志を尊

重して、足を踏み出させる。

それを許す捕食者でもない。たこの形状のそれは、男の身体に全ての足を、1本ずつ絡めていく。

ぎりぎりと、足から逃れようとする身体は、やがて力を失いがくりと頂垂れた。

白銀の世界で、吹き荒れる轟音、それ以上の音は必要ないとまで鳴るその場所で、音が鳴る。

その音は世界の音に隠され、その代わりに色で世界に主張する。白の世界に彩られる赤。

男の仲間達の死体も、死んだ場所の雪を掘ったとしても、もう出てこないだろう。

男達の無念も知らず、世界は叩きつける轟音をもって白銀の世界を蹂躪しているだけだった。

黒の船

黒の船は突き進む。

行く手を阻む、見渡す限りの海を覆う氷を無視し、目的を持って船は氷の大海を裂いていく。

静寂に安定されていたその場を、凄まじい音が静寂を否定する。薄ぼんやりと滲む空。外は生き物が闊歩するには厳しすぎるほどに寒かった。

それに上乘せる雪は、今は降っていない。

今の時期は、雪がその役目を停止させている時期だからだ。

白い、白を突き破る黒の船は、巨大で強大だ。

船の側面に描かれるはずの船の名前は無く、所属組合の認可章も無い。それは当然だった。黒の船は何者にも束縛されない自由だからだ。

世界中の技術を集結させた代物。言葉通り文字通り誇張無い、世界が誇る黒の船。

なまじの船ならこの氷の海を自力で進むことはできない。阻む氷を割るためわざわざ船から降り、進行方向に向かって爆薬などであらかじめひびをいれ進むしかない氷の地平線を、黒の船は己が力だけで割り砕いていく。

その姿、圧巻。

黒の船の中には、十万の義勇兵達が乗っている。

世界から集まった、白人も黒人も黄色人も関係なく、雑多ごったの十万人。

我が物顔で白の世界を行進する黒の船の後ろには、たった十隻の、こちら黒で塗られてはいるが、先頭を走っている黒の船とは、比べるのもおこがましいぐらいに貧相な船が、後が続いている。

その船の中にも、兵士達はある。

黒の船と比べると微々たるものだ。

十隻で、合わせて三千人。

黒の船が開いてくれる道を進みながら、黒の船合わせたそれらの船達は、目的の場所へ向かう。

それらの船は、簡単に言うのなら、世界を救う最後の希望だ。難しく言うのなら、世界の人間達の恨みを、後悔を、怨恨を、数え切れない負の感情を乗せた、幽霊船の如き、死者を運ぶ船だ。複雑なものが絡み合い、だが皮肉にも、いがみ合っていた世界が手を取り合い造られた黒の船。

世界共通の敵を討つための、死者の船。

黒は闊歩する。

白を否定する。

辺りに響かせる轟音を作る黒の船の中で、怒声が船の中の一室を響かせた。

作戦会議騒ぎ

「あいつらの思い通りにはさせてやりはしねえ！！」

男は吼える。

船内の人間達と比べると圧倒的に少ない、数十名を押し込んだ一室で、海賊のような風貌の男は吼えていた。

時代を遡ったかのような男の前には、長いテーブルに腰掛ける、バラバラの服装の男達。

男の吼えた言葉の内容を吟味する者はいない。皆一様に、その男の声の破壊力に耳を痛めて顔を顰めている。

テーブルに座る男達の服装がバラバラなのは、世界各国の、一つの国が代表する指揮官達だからだ。

一人一人が国を代表するために、祖国の軍服に身を包んでいる。

ただ一人、時代遅れの、どこの国代表かも分からない海賊風の男が、場を取り仕切っている。

海賊風の男がイライラしたようにおっかない顔をさらにおっかなくさせている。

普通なら、世界の代表達と言えばその海賊風の男と初対面で、その海賊風の男が子供のようになり怒りを主張すればするほど、増長されるように代表者達はその海賊風の男に食って掛かるだろう。

その男に、この黒の船を統治させるわけにはいかない、と。

だがそれは現実にはなりえなかった。

海賊風の男の前にはいるのは、全員が全員、海賊風の男のことを知っている者達ばかりだった。

代表者達は一度、その男の下についたことがある者や、その男と

の知り合いで統一されている。

それゆえに、海賊風の男が感情に任せて吼えるのを見ても、皆が皆「またか」と、あるいは「やれやれ」といった顔をしているだけだった。

「オレのもんだぞこの世界は！ オレ以外のクソボケ共がなにオレのもんを勝手に勝手しやがってんだ！」

キャプテン
「船長」

「あぁっ！？ おうおうなんだお前、お前今オレが『怒髪で天を衝いてる』のがわっかんねえのか！？ 判ってんなら黙れ、判らねえなら黙れ！！」

キャプテン
「船長、日本語を入れるのは止めていただきたい。あなたが言いたいことは、不本意ながら大体分かりますがとりあえず言っておきます。世界はあなたのもものでもありませんし、今は感情に任せて叫ぶ時でもありません。了解しましたか？」

「ああああうるせえ！ 確かにオレは日本人じゃねえよだが日本で生まれて日本で育ったんだよなのに英語で喋れってえのはオレに対する虐待じゃねえか！ オレの努力判ってねえだろお前！ 今だってお前世界共通の言語様で喋ってるっつうーのに、日本の『ことわざ慣用句』をわざわざ世界共通様で喋れってえのはオレの頭がついてかねえんだよ！」

「あぁはい判りました。では、解決策を言いましょう」

「あぁっ！？ なんだよインテリがあっ！ 言ってみろ解決策をよ

おっ！」

「日本の、『コトワザカンヨウク』、を言わなければいいんですよ。簡単ですね」

「カタコトで喋ってんじゃねえぞ外人が！！」

理不尽な怒りを振りかざす海賊風の男。

そんな男の姿に呆れるように、さきほどもでその男と対話を試み喋っていた白人である青年は、短い金糸の下の眼鏡の位置を直しながら溜息を吐く。

周りの人間達も同様だ。

その部屋の中に集まっている人間達は、一人一人、誰一人の視点から見ても、外人と呼べる者達で構成されていた。

誰一人として祖国を同じとする者はいない。

だから、海賊風の男がその青年を『外人』と言おうとも、それは区別でも差別の意味にもならなかった。

それに気付いているのか気付いていないのか——間違はなく後者だろうと部屋の中の全員が思った——、男は尚も声を荒げる。

「外人風情がオレに口答えしてんじゃねえぞクソツカスがあ！」

「えつとですねえ船長^{キャプテン}。それよりも早く作戦会議を開きませんか？」

「なんだなんだ今日はなんだ偉い奴らが集まったもんだよなあオレに何言つてやがんだあちくしょうが！！ 大統領か総理大臣か世界がお前ら！ オレが世界だ！」

黒の髪を肩口まで伸ばした、周りの屈強すぎる者達と比べるとひ弱そうな印象を受ける、海賊風の男と同じ国で生まれた男の控えめな言葉は無碍の一振り。

両親はどちらも日本人。生まれは日本だが、育ちは名も知らぬ弱小の国。それでも日本とは違い、銃を保持した国で育ったにも関わらず、日本人の特性をそのまま受け継いでしまったその男は、30代後半のはずなのだが、周りが周りなので若いように見えた。

ちなみに海賊風の男は、自分のことを日本人だと思っており、それを誇っている。

風貌は誰からどう見ても白人のそれだが、海賊風の男は自身に流れる血を気にせず、日本で生まれ日本で育ち、日本の心を胸に世界を渡り歩いてきた自分のことを、迷うことなく断言的に日本人だと言いつ張っていた。

そして、海賊風の男は、顔だけは日本人のその男のことを嫌うように『外人』だと批判する。

海賊風の白人が日本代表で、日本人風の黄色人種が弱小国家の代表。

見た目で言うのなら反転しても問題は無さそうだ。

「へいへい分かりましたよ『ザワールドインワールド』さんよ。キャプテンで、船長。怒鳴るのはいいがいい加減怒鳴るのだけってえーのはやめましようや。今は会議、懷疑、会議でいきましようって」

「くそっ！ 本当に今日はお偉いさま方が多いなおいっ！ 船から叩き落すぞ！」

「勘弁してくれって。キャプテン船長冗談抜きで強えんで、俺思わず本気出し

ちまつかもしれませんよ。敵を目の前にしてそんな消耗、馬鹿しか
しませんって」

肌の黒い黒人男性は、頭髪の無い頭を緩く撫でながら困ったように苦笑する。

海賊風の男をなだめすかそうと頭の中でめまぐるしく思考し、検討し、どの方法もシュミレートの介に吊り合うことなく見事惨敗する。

あー、ともはや意味の無い言葉を二の句に、部屋に集まる男達の中でも温和で対話ができそうな黒人男性すらも、諦めに溜息を吐いた。

「おう？ なんだと？ オレを馬鹿だと言うのか？ あ？ 言うのかよお前！！」

「言ってますんって」

「おうよっしゃならば受けて立つぞ外人が。表出る表エ！」

「おいこの馬鹿どうにかしろ」

「む、無理です勘弁して下さい……」

鋭い目を眼鏡の下に隠す白人の青年が、海賊風の男に指を突きつけて日本人顔の男に視線を向ける。

だがもちろん、横暴という名が似合いそうな海賊風の男を、部屋の中では一番弱そうな男が止められるはずもない。話術が通じなけ

れば、どうすることもできないのだ。

「あぁっ！？ お前今完全完璧にオレのことを馬鹿だと言っ たな！
？ —— 殺すっ！！」

「受けて立とう。…… と言いたところだが、誇りの前に馬鹿が伝染りそうなので、謹んで辞退させていただきます」

「あー、それ正解。お前は偉いよ」

「黒人風情に称賛されるのは虫唾が走るな。止めていただきたい」

「—— アんだと？」

「う、うわ2人共落ち着いて、落ち着いて！」

白人と黒人が睨み合う真ん中を、黄色人が慌てて争いを起こさぬよう止める。

「白人が調子に乗りやがって……」

「喋るな。黒人臭は臭くて敵わんからな。息をするな」

「デメエ……」

さきほどまで温和な顔をしていた黒人男性は、劇的なまでに凶暴

を全面に出した表情をする。

対して白人の青年は、口元に強者の意思を傲慢に宿し、せせら笑っていた。

彼が怒るのが心底楽しいのだろう。

仲介に入ったはずの黒髪の男は、あわあわとするだけで、どう言葉を発していいかわからず両者を交互に見ている。

部屋の中にいる、他の者達は、海賊風の男が怒鳴った時よりも呆れた気持ちで椅子の背もたれに身を預けていた。

そして、一瞬のうちにして忘れ去られてしまった海賊風の男が、自分を中心に会話が展開していないことに顔を赤くさせ、床を踏みつける音と共に声を荒げる。

「うるせえうるせえうるせえー！！ 全員注目！！ 今から作戦会議をするー！！」

「やっとですか」

「ああもう。この、喧嘩の真似は肩が凝るんだあーって。本当勘弁してくれ」

「2人共、大方本気だったと思うんだけどなあー……」

海賊風の男が宣言すると同時に2人の睨み合いが解かれる。

2人は今の人種を持ち出した争いを道具として、海賊風の男から『作戦会議』という言葉を引き出したのだ。

白人と黒人。仲が良いとは言えないが、この2人の関係はなかなかに良好だ。人種の話は道具にできるまでに。

思うところが無いわけではない。だが今は緊急時だったので、使

ったまでのこと。

黄色人である黒髪の男は、2人の本物の殺気を感じ取っていたために、少々顔を青くして深々と溜息を吐いた。苦労は絶えず、胃が軋みそうだと心中こぼす。

黒髪の男の心労を知らず、海賊風の男は自分の下に椅子を引き寄せる。

どっかりと座り込み、腕を組み足を組みふんぞり返る。その姿勢で、怒気を孕ませた声色で告げた。

「お前らで好きに作戦会議しやがれ」

「「「了解、イエスサークソ船長」」」
キャプテン

一室、全員の声が重なった。

海賊風の男は、言葉に含まれた意味に気付かず、「おう」と少し満足げに頷いた。

その顔を見ていた数人が呆れ諦めた表情を隠そうともせずに溜息を吐いている。

この男は、言うならば『馬鹿』なのだ。

自己中心的思想に、大人になりきらない突発的な行動。氣に入らなければ、暴れる。自分が考えていたことと少しでもズレれば、憤怒する。

男は、馬鹿なのだ。

だがここにいる人間達は皆、その馬鹿に付き合っている。

意識的にこの男を馬鹿だと呆れつつも、無意識でこの男を認めている。

なぜか。

それは誰にもわからない。

いわば、無意識なのだ。

最初にこの海賊風の男のことを人生の中で一番認めることができない人物と第一印象で決まっても、いつの間にかそれは覆されていた。

その『馬鹿』を中心に、やっと作戦会議が開かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2850p/>

世界変革戦争

2010年12月11日00時20分発行